独立系の台頭

ケネス・トゥラン

現代の米国における独立系映画業界は、数人の勇気ある監督が自費を投じて、ハリウッドの映画会社が資金提供しようとしなかった作品を製作したときに生まれた。しかし、大抵は低予算ながらも上質なこれらの作品は高く評価されるため、独立系映画産業は成長し、繁栄するようになった。ケネス・トゥランはロサンゼルス・タイムズ紙と全米公共ラジオの番組「モーニング・エディション」の映画評論家。「Now in Theaters Everywhere: A Celebration of a Certain Kind of Blockbuster」（2006）や「Sundance to Sarajevo: Film Festivals and the World They Made」（2002）など著書数冊。

デルタ航空はジョージア州の８大学で映画製作者志望の多くの学生を励ます 2004 年の映画祭を後援。中には初めて製作した学生もいる。セーラ・ウィットマーシュはジョージア大学の学生組織の映画を撮った。
©AP Images/John Bazemore

独自の映画産業を持つ大部分の国や地域は、自分たちを幸運だと思っているだろう。活気を呈している地域としてインドや香港がすぐに思い浮かぶが、米国は、今後も発展しそうな映画産業をひとつならず２つも持っているという意味で特権的立場にある。

まずは映画が上映されているところならどこでも知られている本場ハリウッドの映画産業だ。ここから「スパイダーマン」「パイレーツ・オブ・カリビアン」などのブロックバ

スターが世の中に送り出される。製作費数億ドルをかけて作られるこれらの作品は、世界で数十億ドルを稼ぎ、ほとんど際限なく続編を生み出す。

しかし、20 年余り前から、これと平行して発展し成功を収めてきたもうひとつの米国の映画産業が、独立系映画界である。毎年、この業界独自の映画祭（ユタ州パークシティーのサンダンス映画祭）が開かれ、オスカーのインディーズ版「インディペンデント・スピリット賞」もあり、授賞式はアカデミー賞の数日前に行われる。独立系専門の劇場もあり、独立系の仕事を中心に活動する俳優や監督もいる。

とはいえ、米国映画界を構成するこれら 2 つの業界がまったく共生していないわけではない。それどころか、活発な共生関係にある。トム・クルーズがポール・トマス・アンダーソンの「マグノリア」に出演したときのように、ハリウッドの大スターが独立系作品に出たことで賞賛されたりする。反対に「アルマゲドン」「アイランド」といった従来型のブロックバスターに出演した筋金入りインディーズ俳優であるスティーブ・ブシェミのように、独立系の俳優がハリウッド映画に居場所を見つけることもある。さらに、独立系作品は最もハリウッド的なイベントであるアカデミー賞に大きな影響力を持つようになっている。

それでも、最終的にハリウッドと独立系を区別する基本的な要素が２つある。ひとつは映画の製作費であり、もうひとつは作品そのものの感性とテーマである。米国の映画界では、常にこの２つが結びつけて考えられる。

芸術性の強調

映画会社の製作する平均的作品は製作費が 1 億ドルを超えるが、そのような場合、製作費回収のために、米国内だけなく国外においても可能な限り広範囲の観客を引きつけなければならない。つまり、どこの観客でも好反応を示すアクションや、最も映画をよく見る 25 歳以下の若者層にアピールする要素を強調することになる。一方、独立系作品のコストは安い。製作費は数千ドルから 1500～2000 万ドルまでといったところだ。それでも大金に思われるかもしれないが、ハリウッドの基準ではたいしたことはない。そして低予算であるからこそ、作品をより個人的なもの、より独特なものにすることができ、また爆発シーンよりもキャラクターとストーリーに重きを置くのも自由というわけだ。またこれらの映画は、興行収入よりも芸術性や自己表現を重視する。アカデミー賞では、高利益をあげる大ヒット作よりも、得てして独立系映画が健闘する理由のひとつはここにある。

40～50 年前に米国の映画ファンが映画の中でこの種の経験をしたいと思ったときは、外国映画を見るしかなかった。1950 年代と 1960 年代にフランス、イタリア、日本、北欧などの映画の観客が増えたのはこれが一因である。

米国の観客が同じような経験ができる母語による独立系映画は、突然出現したわけではない。俳優で監督でもあった故ジョン・カサベテス（インディペンデント・スピリット賞には個人名を冠した唯一の賞「ジョン・カサベテス賞」がある）は、伝説的な「アメリカの影」を撮った 1957 年にはすでにインディーズ・スタイルの作品を手がけていた。

ジョン・セイルズの「セコーカス・セブン」（1980）を、現在の独立系映画の流れをつくり出した最初の作品として評価する人も多い。製作費は 6 万ドル。セイルズ自身が映画会社の脚本を書き直すなどして資金を調達した。この作品は最終的に 200 万ドルの収益をあげた。これによって初めて、映画会社のシステムに頼らなくても収益と創造性を両立させられることが証明された。

脚本家で監督のジョン・セイルズ。

©AP Images/Krista Niles

独立系の確立

独立系の業界大手であるミラマックス社（ハーベイとボブのワインスタイン兄弟が設立して、両親の名前を組み合わせて社名にしたもの）が配給した 2 つの作品は、独立系映画

の定着をはっきりと印象づけた。1989 年、スティーブン・ソダーバーグの「セックスと嘘とビデオテープ」はサンダンス映画祭で審査員賞、カンヌ映画祭で最高賞のパルム・ドールに輝き、米国の独立系映画を世界に知らしめた。

クエンティン・タランティーノの「パルプ・フィクション」はさらにその一歩先を行き、1994 年のパルム・ドールを受賞したばかりか、興行収入が 1 億ドルを突破した最初のインディーズ映画になった。その前年にミラマックスを買収していたディズニーの先見の明を裏付ける出来事だった。

独立系作品を製作するには、自分たちの常駐スタッフではあまりにも勝手が違いすぎると悟った映画会社は、こぞって傘下に独自のインディーズ部門をつくろうとした。現在、業界では「特殊専門部門」として知られるこうした会社には、フォックス・サーチライト、ワーナー・インディペンデント・ピクチャーズ、ユニバーサル・フォーカス、伝統あるソニー・ピクチャーズ・クラシックスがある。

このような特殊専門部門からは、ビッグな予算とビッグなスターを投入した第一級の独立系作品が生み出される。これらはハリウッド映画と大差ないように思えるが、実際のところ、ハリウッドはこうした作品をもはや製作しない。良い例が「リトル・ミス・サンシャイン」だ。これは、2007 年 2 月のアカデミー賞で最優秀作品賞にもノミネートされ、脚本賞受賞に落ち着いた映画だが、大手スタジオからは何度も製作を断られていた。

独立系作品は感性が独特であるばかりか、さまざまな人々の姿を映し出し、さまざまなストーリーを語ることができる。独立系映画の分野では莫大な製作費を必要としないので、アフリカ系米国人のスパイク・リー、同性愛者のグレッグ・アラキなどの監督が社会の片隅にいる人々を主人公にして幅広い観客に訴える力のある作品を生み出すことができたのだ。

デジタル効果

独立系ドキュメンタリーも勢いをつけているが、これにもコストが関係している。現在、かつてないほど、多くの独立系ドキュメンタリー作品が製作され、多くの観客の心をとらえている。それにはいくつか理由があるが、重要な決め手は、撮影コストが安くあがるデジタル機器が、ドキュメンタリー映画作家の製作手段として手に入るようになったことだ。

その好例が、ミュージックビデオやコマーシャルフィルムの監督スコット・ハミルトン・ケネディである。彼がカリフォルニアの高校でソーントン・ワイルダーの芝居を上演しようとしている教師に出会わなかったら、高い評価を受けた「OT: Our Town」は生まれなかっただろう。女性教師からプロジェクトを聞かされたケネディは、なんとしてもその過程を記録しようと考えた。「資金を調達したり、スタッフを集めたりしなかった」と彼は言う。「そんな努力をして時間を無駄にすれば、今この瞬間を記録せずに逃してしまうとわかっていたから」

ケネディは、本人の言葉によれば家電チェーン店「サーキット・シティー」で買えるような目立たないカメラを持って、高校に通った。被写体を緊張させないそのカメラのおかげで、まわりの生徒たちをリラックスさせることができ、作品の最大の長所となった親密さと信頼が生まれた。

資金に縛られないおかげで自由な考え方ができる独立系映画は、結果的には、近年米国でつくられた映画の中でも最高級の作品を生み出している。

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解または政策を反映するものではありません。